



表紙

小林英樹「ふたり、あるいは、まだ見ぬ人」

紙に数種類の筆記用具

1985年

形而上学的世界に投影された像（表紙絵の解説）

小林英樹

* ta meta ta physika（自然学の後の書＝形而上学【日本語訳】）

真っ暗闇の中に降り注ぐ光子は遠い宇宙空間からたどり着いたものだ。それらがどの天体のいつの爆発で誕生したものなのか、どういった経路をたどって到達したのか知らないが、さらけ出された胸の中心で脈打つ真っ赤な心臓に突き刺さっているのを感じないではいられない。いつもそうなのだ。放り出され、暗黒の宇宙でむき出しの肉体と魂の重圧に耐えかねて、ひとり遠い宇宙の方角を眺めながら、小さな声で叫ぶのだ。「結実する愛はどこまで高みなのか」。音の断片は、遠い宇宙空間に響いたように感じられた後、消えていく。その音は、わたしのなかでまた迫りくる白色の星団や無数の白い粒々の間に反響し消えていく。あまりに鮮明な星々は、ここに存在するものの頼りなさを一層際立たせてしまうのだ。「ナッシング・バット・ファイン！」前を歩いている少女は、そんな言葉を撒き散らしながら去っていき、真似をして同じ音を発した。そうさ、どうせ、何もないんだからね。だから享受し、ほめたえたいね。なにもかもファイン！と言ってふっとぼしたいね。そして、ひたすら存在でありたい。何もわからなくてもひとつの主体として。するとそこにバナナのような幾層にもわたる光子のきらめきが生まれ、漆黒の空中でしばらく輝き続けていた。宇宙の片隅に真っ白く光る大河のような星々との間には何の隔たりもなく、そこにあるものはそこにあり続けている。打ちのめされ疲弊した心臓に、はるか彼方の宇宙からたどり着いた宇宙線や光子が霜柱のように無数突き刺さっている感じがわかるだろうか。悠久と齷齪した現実の時間の絡み、それは虚実が渾然としている様子の圧縮された表現に過ぎないにしても、こういった捻じ曲がった、いや圧縮された時空のなかにある存在いや時空そのものであることを実感できる瞬間なのだ。いつまでも小さな声で叫ぶのだろうか。「誰をわたしは愛すべきなのか。愛とは何か。愛さずに終えていいのか」誰に向かって？過ぎ去っていった少女に？闇の向こうから出現する少女に？いずれも否。なぜかわからないまま。そうしなければならないほどの、あるいは、忘れてしまいそうなほどかすかなもの。だが確かにあるもの。もう半分消えかかっているもの。だから、だから急がなければならない。やっぱり、いつもいつもそうして滅びるまでわたしは愛するものを愛して宇宙のかげらとして散っていきたいな。ナッシングだから存在であって、何もないから自分でありたいよ。